



ニューイヤー名曲コンサート2020

プログラム

2020年最初のCDコンサートは、ニューイヤー名曲コンサートでスタートします。今年のウィーン・フィルニューイヤーコンサートは初登場のネルソンスでした。その中からシュトラウスの名曲と昨年生誕200年だったスッペの名曲を。昨年は終番になって11月に名指揮者マリス・ヤンソンス、12月には名テノール、ペーター・シュライアーと相次いで名演奏家の訃報が伝えられましたが、今日は得意とする名曲を聴きながらふたりの名演奏家を偲びたいと思います。後半は今年生誕150年に当たるウィンナ・オペレッタの代表的作曲家フランツ・レハールの名曲を集めてお聴きいただき、次いで、ショパンの名曲ピアノ協奏曲第2番をバックが弦楽アンサンブルという珍しい室内楽版の演奏をご紹介します。新鮮な響きをお楽しみください。最後は壮麗な管弦楽の名曲、チャイコフスキーの大序曲「1812年」で締めくりたいと思います。13年5ヶ月に渡り「龍ヶ崎ショッピングセンター“リブラ”」でのCDコンサートをご愛顧いただき、誠にありがとうございました。3月からは場所を移しますが、引き続きよろしく御願ひ致します。(中川)

ヨハン・シュトラウス二世 (1825~1899):
ワルツ“シトロンの花咲くところ” op.364

フランツ・フォン・スッペ (1827~1897):
喜歌劇“軽騎兵”序曲

アンドリス・ネルソンス指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2020.1.1 ウィーン・ムジークフェラインサールでの生Live ~ニューイヤーコンサートより~)

フランツ・シューベルト (1797~1828):
セレナード (歌曲集“白鳥の歌” D957 第4曲)

ペーター・シュライアー (T) / アンドラーシュ・シフ (P)
(1988.6.23 フェルトキルヒのシュタットハレでのLive)

エドヴァルド・グリーク (1843~1907):

組曲“パール・ギュント”~“ソルヴェイクの歌”(第2組曲)/“山の魔王の宮殿にて”(第1組曲)

マリス・ヤンソンス指揮オスロ・フィルハーモニー管弦楽団
(1999.10.27 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

クスタフ・マーラー (1860~1911):
交響曲第3番ニ短調~第6楽章

マリス・ヤンソンス指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団
(2015.3.1 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

*** 休憩 ***

フランツ・レハール (1870~1948): 【生誕150年に寄せて】

喜歌劇“メリー・ウィドー”~第1幕“花は春に咲き誇り” ホセ・カレラス (T)

喜歌劇“メリー・ウィドー”~第3幕“唇を閉じて”

ブラシド・ドミンゴ (T) / ホセ・カレラス (T) / アンドレア・ロスト (S) / エヴァ・リンド (S)

喜歌劇“ジュテイツタ”~第1幕“友よ、この世は生きる価値がある” ブラシド・ドミンゴ (T)

喜歌劇“ジュテイツタ”~第4幕“私の口づけは熱く” アンドレア・ロスト (S)

マルチエツロ・ヴィオツティ指揮ブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団
(1998.7.31 オーストリア、パート・イシユル・カイザー・ヴィラ (皇帝の館)でのLive)

ワルツ“金と銀” op.75

ハインツ・ワルベルク指揮ウィーン・トーンキユンストラ管弦楽団
(1985.10.14 五反田・簡易保険ホールでのLive)

フレデリック・ショパン (1810~1849)

ピアノ協奏曲第2番ニ短調 op.21 (室内楽版)

辻井伸行 (P) / 伊藤 翔指揮弦楽アンサンブル (三浦文彰 (V) / 川久保賜紀 (V)
レヒ・アントニオ・ウジンスキ (Va) / ヨナタン・ローゼマン (Vc) / 加藤雄太 (Cb))
(2018.10.8 サントリーホール ブルーローズでのLive)

ピョートル・チャイコフスキー (1840~1893):

大序曲“1812年” op.49

ユーリ・テミルカーノフ指揮サンクトペテルブルク・フィルハーモニー管弦楽団
(1993.6.29 サントリーホールでのLive)

曲目解説

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ「シトロンの花咲くところ」作品364

シュトラウスは1874年5月にイタリアへの演奏旅行に出かけ、トリノで新作のワルツ「ベラ・イタリア」初演しました。ウィーンに帰国後、「シトロンの花咲くところ」と改題したのがこの作品です。このタイトルはゲーテの小説「ウィルヘルム・マイスターの修行時代」の中にある詩から取られています。

スッペ：喜歌劇「軽騎兵」序曲

2019年が生誕200年だったスッペの最もポピュラーな名序曲で、1866年47歳の時に初演されました。ウィーンの詩人カール・コスタの台本による愉快的な軍人生活を描いたもので、いろいろな舞曲をふんだんに取り入れた楽曲は聴衆からの支持を受け、大成功を勝ち取りました。曲は劇の中の5つの旋律を使用したもので、軽騎兵の奏でるトランペットとホルンの斉奏で始まり、軽騎兵たちの後進のあと、一転して戦友をいたむような抒情的なチェロの合奏に移り、ふたたび勇壮な行進曲に戻ると、最後は力強く曲を結びます。

シューベルト：セレナード（歌曲集「白鳥の歌」D.957 第4曲）

この14曲からなる歌曲集は、1828年に作曲された遺作の歌曲をシューベルトの死後、出版社が独自に集めてひとつにまとめたもので、曲全体に一貫した意味はありませんが、シューベルトの最晩年の歌曲としても重要で、なかでもセレナードは最も美しい名曲のひとつとして知られています。第1曲から第7曲がレンシュタープ、第8曲から第13曲がハイネ、第14曲がサイドルの詩によっています。

グリーグ：組曲「ペール・ギュント」

1875年に作曲された劇音楽「ペール・ギュント」はヘンリク・イブセンが1867年に発表した戯曲に音楽を付けた作品です。物語は「粗暴で未来を夢みる、貧しい農家の一人息子ペールは結婚式場から花嫁を奪って生活しますが、山に逃げ出し、さまよい歩くペールを救ったソルヴェーグをも捨て、苦悩と幻想のなかで年老い、たどり着いた故郷に待っていたソルヴェーグに抱かれて息絶えるのでした」というもので、後に1888年に第1組曲、1891年に第2組曲が演奏会用にまとめられグリーグの代表作として親しまれています。

マーラー：交響曲第3番ニ短調

1896年マーラーはオーストリア郊外のアルプスのふもとにあるシュタインバッハという村にたてこもってこの曲を完成させました。圧倒的な自然の風景に靈感を得て作曲されたと言われていますが、生命が誕生していない自然から、動植物、人間を経て天国的な世界へ至るまでを6つの楽章で表しています。第3楽章は「子供の不思議な角笛」からの歌曲「夏の日の交替」を引用し、第4楽章はニーチェの「ツアラトウストラはこう語った」第4部の「酔歌」からの歌詞がアルト独唱で歌われ、第5楽章は「子供の不思議な角笛」から「3人の天使は歌う」に基づいた歌詞が児童合唱、アルト、女声合唱によって歌われます。マーラーの最高傑作と呼んでも良い作品ですが、特に最終楽章はあらゆるシンフォニーの中でも最も美しく感動的な楽曲のひとつと言って良いでしょう。

第1楽章 力強く決然と 第2楽章 テンポ・ディ・メヌエット 第3楽章 コーモド・スケルツァンド
第4楽章 きわめてゆるやかに 第5楽章 快活な速度で表出は大胆に 第6楽章 ゆるやかに平静に感情をこめて

レハール：喜歌劇「メリー・ウイドー」

レハール：喜歌劇「ジュディッタ」／ワルツ「金と銀」

今年生誕150年を迎えるフランツ・レハールはオーストリア＝ハンガリー帝国下のコマーロムで生まれた作曲家で、軍楽隊隊長の父から音楽の手ほどきを受け、1882年12歳でブラハ音楽院に入り、ヴァイオリン理論を学びました。ドヴォルザークの忠告で作曲家を志し、各地の軍楽隊指揮者を勤めながら作曲をはじめ、1902年に発表した喜歌劇「ウィーンの女たち」の大成功でウィーンを拠点に作曲に専念するようになります。1905年にウィーンで初演された「メリー・ウイドー」は空前の成功を収め、レハールの名は一躍世界的なものとなりました。今日ではウィンナ・オペレッタの代表的作曲家として知られています。

「メリー・ウイドー」は、巨額の遺産を相続した未亡人ハンナと、かつての恋人ダニロ伯爵が数々の駆け引きの末にふたたび結ばれるまでを描いたウィンナ・オペレッタの傑作です。

「ジュディッタ」は、1933年に作曲、1934年にレハール作品としては初めてウィーン国立歌劇場で初演された最後のオペレッタです。地中海の港町とアフリカを舞台に、港町の人妻ジュディッタと彼女に一目惚れするアフリカ戦線に向かうオクターヴィオ大尉の恋の駆け引きを描いたスケールの大きな作品です。

ワルツ「金と銀」は、1902年にメッテルニヒ伯爵夫人主催の舞踏会のために作曲されました。会場を彩る装飾、出演者の衣装も金銀に照らされた豪華な舞踏会にふさわしく、華麗で優雅な名曲です。

ショパン：ピアノ協奏曲第2番ヘ短調 作品21（室内楽版）

1829年の作品で、実際は第1番より先に作曲されました。ノクターン風の美しい第2楽章は、初恋の人コンスタンツィアへの思いから生まれたという逸話が手紙によって明らかになっています。室内楽版は1830年代に弦楽器（五重奏）とピアノのパート譜だけの「部分販売」として出版されていて、編曲でも室内楽用の別の楽譜が存在したわけでもなく、当時の演奏習慣にならい小編成でも演奏できるような配慮がなされていたと思われる。

第1楽章 マエストーソ 第2楽章 ラルゲット 第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

チャイコフスキー：祝典大序曲「1812年」作品49

1812年ナポレオンがモスクワに攻め入ったものの、敗北するという物語を描いた描写音楽で、1880年に作曲されました。初演時にはモスクワの広場で大管弦楽と大太鼓の代わりに砲兵隊の祝砲が用いられました。フランス国歌とロシア民謡を主題に用いながら見事な管弦楽法で描き切った名曲です。